

ジュニアスポーツ教育学科への熱い想い

福祉臨床学科

横山ひろみ

「スポーツの新しい学科を作ろうと考えている。」児童教育学科の学科会議後の雑談で、山根学長（現 親和学園理事長）が言われた言葉に、周りの教員は一瞬「えっ？」と思いましたが、すぐに「ああ、それはいい考えかもしれない。」という気持ちになりました。ジュニアスポーツ教育学科ができる2年程前のことです。

当時、児童教育学科の中には、初等教育学コース、幼児教育学コース等とともに、生涯体育・スポーツコースがあり、体育指導の得意な先生、地域等でのスポーツ指導者の育成を目指した教育が行われていて、毎年多くの学生が学んでいました。学長が言われたスポーツの新学科というのは、児童教育学科に在るそのコースを発展し、独立させる構想であると思われましたので、自然な流れとして、みんな納得できたのでした。

しかし、新学科を設立するためには、文科省への申請や審査など膨大な手続きや関門を経なければなりません。そうした見通しについても、「大変でしょうが山根学長はきっと作られるに違いない。」という確信がありました。学長就任以来、先生は発達教育学部の設立や通信教育部の開設など次々と実現されて、本学の発展のために新機軸を拓いておられたからです。

その新学科の申請の過程で、教育分野の担当として私に来てほしい、というご依頼がありました。新学科は、一般の体育大学とは立ち位置を異にする。つまり、ジュニアスポーツ「教育」学科であり、児童教育学科を母体とし、子どもの教育への知見を基にしてスポーツを学ぶ学科であることから、教育分野からの指導が必要ということでした。私は、「喜んで行かせて頂きます。」と申しました。1学年60名の学生を擁する元気一杯の、

そして将来は大学の未来も背負うであろう新学科のために、できる限りの力を尽くしたいと思いました。新学科へは、母体である児童教育学科から新学科長の但尾先生と私が行きましたので、学科が開設された後も、設立の理念による教育を主体とした学科の在り方について、先生とよく話し合ったものでした。

新学科の申請手続きは順調に進み、2007年冬に開設が確定したのに伴って、新しい6号館の建設計画も本格化し、またスポーツ界から著名なゲストを招いて、開設記念の講演会シリーズを毎日新聞大阪本社のホールで開催し、多くの高校の先生方やスポーツ関係者が来場されました。私達教員も、第一期生を迎えるために、さまざまなことを相談しながら新学科の準備をしていきました。その過程で、学科の統一トレーナーのデザイン選び、色選びもし、大学のマークを取り入れた学科独自のエンブレムも創作して胸に付けました。そのトレーナーには、学科の魂が込められていると思います。

こうした中でいよいよ入試が行われましたが、高校生の人気は高く、多くの受験者がありました。面接にも、テニス、ソフトボール、バレーボール、バスケットボール、ダンス、柔道など、多彩なアスリート達が目を輝かせて臨んでいて、彼女達が入学して来てくれるのがとても楽しみでした。実際、入学式の際も、呼名にしっかりと答えて起立するジュニアスポーツ教育学科の新入生の姿は、はつらつとした新風を感じさせてくれました。

4月になり、設備等まだ十分に整わない状態ではありましたが、第一期生は元気一杯にスタートを切りました。5月、大阪泉南の海洋センターへ

の1泊の親和行事でも、海で一人乗りのヨットを操縦したり、チームで力を合わせてカッターを漕いだり、スポーツ教育の学科ならではのプログラムを楽しみました。しかし、海辺でのカレー作りの際には雨になりましたが、テントから雨風が吹き込む中で黙々と調理し、食事をした後も、ずぶ濡れになりながら調理器具を洗って片づけた学生達を見て、私はとても感動し、終わりの挨拶でも大いにその忍耐力と頑張りをほめました。

1期生には、「私達が新学科の第一歩を記すのだ。私達が歴史を作るのだ。」という気概がありました。教員達も一生懸命に学生達に向き合い、共に歩いていきました。まだ不自由なこともたくさんあったと思いますが、彼女達は本当によく頑張ってくれました。素晴らしいスポーツの実績を挙げて、神戸親和女子大学の名前を関西に、全国に轟かせ、そしてジュニアスポーツ教育学科の気風を作り上げ、現在に至る学科の着実な発展を導いてくれました。就職率約95%の素晴らしい結果を残して卒業していった彼女達。導かれて後輩達も成果を挙げています。今やジュニアスポーツ教育学科は、本学には無くてはならない重要な学科となっています。私はそれを見て、感慨無量の気持ちです。そして、これからもますます発展し続けていくことを、心から期待しています。